2023年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2024/9/30

団体名	浪速地域・地域活動協議会	活動タイトル	子どもの居場所づくり・子ども見守りおよびヤングケアラー支援活動

望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）

●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	当団体の実現したいビジョンは、「誰ひとり取り残さない地域社会」である。 地域ぐるみで子どもを見守り、支援対象となる家庭の課題を地域で共有することで、地域の大人や教育・福祉の専門知識を持つスタッフが適切な時に適切な支援を行なえるような地域社会の構築を目指している。公営住宅が多く、貧困家庭・環境に課題を抱える家庭が多い中で、家庭や子ども自身の自助努力だけでなく、地域全体として教育・子育てをサポートするための体制を整え、今後ますます充実させていきたいと考えている。
●団体の社会的役割(ミッション)	当団体の社会的役割（ミッション）は、地域の子どもに「自分自身で生きる力」を身に着けさせることである。困難な状況にある子どもたちに、家庭・学校以外の居場所を与え、定期的な学習機会を設けることで学校のカリキュラムについていけるようにサポートする。それによって得られる達成感により、自発的に勉学やその他課外活動に励む意欲を子どもの中に芽生えさせ、結果として不登校の解消、成績の向上へとつなげ、最終的には大学進学や正規雇用としての就業などを達成し、貧困の連鎖から自ら抜け出す力を身に着けることができるような環境を整える。
●団体の活動基盤	●人的資源：教育や福祉の専門知識を持った常駐スタッフ。またグローバル化している地域環境に対応できる、多言語・多文化対応ができるスタッフ。また、食事支援や教育支援において実働を担う有償ボランティアで、さらに大学生などの子どもたちにとって将来のロールモデルになり得るような身近で年齢の近いスタッフ。●物的資源：子ども食堂のための食材と共に、子どもたちの教育環境はコロナ禍によって一変した。リモート授業やデジタル環境に対応している家庭や学校もある一方で、情報環境（デジタル・ディバイド）の拡大が懸念されている。そのため家庭外において学習用のデバイスなどを用意する必要がある。 ●活動資金：子ども食堂のための食費、子どもたちの社会見学やキャンプなどの旅費・交通費、ゲスト講師やボランティアスタッフを呼ぶ際の謝礼などを合計した活動資金が必要となる。

■活動風景

子ども食堂でカレーを食べる子ども、クリスマスのプレゼントを受け取っているきょうだいの子ども

警察署の方に来てもらい講習、学習支援ルームで宿題をみんなで解いているようす

■活動報告

●学習支援

子どもたちの学力向上と社会科見学による経験の多様化を促すべく、毎週の活動の中でコミュニケーションを図り関係構築を進めつつ子どもたち自身による将来設計のためのアドバイスを継続して行った。

●子ども食堂

子どもたちの食生活を基本的な健康水準へ押し上げるべく、毎月の活動の中で特にヤングケアラーできょうだいや親の世話に負担を感じている子どもへは重点的に見守りを兼ねた配達を行った。

●教育・子育て支援

関係機関と連携し、家庭から離した方がいいケースも含めて個別の事案の支援を続け、何度も家族とやりとりしながら生活が安定するよう働きかけた。

●インターンシップ

看護学校や大学、日本語学校とコンタクトをとり、ボランティアスタッフの募集やインターンシップを継続して行うように働きかけた。

■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)

●学習支援

・小学生週1、中学生週3回実施

・高校入試全員合格

●子ども食堂

・毎週月曜日・第1～3水曜日に実施

・登録者のうち5名が学習支援への参加を達成

●教育・子育て支援

・月30～40件実施

・保護者の悩み120件、ヤングケアラーの悩み40件を解決

●インターンシップ

・学校訪問５回

・日本語学校の留学生とインターンシップを組むことを達成

■事業を通じて得られたノウハウ

●社会科見学などによって外部の団体と繋がることができ、子どもたちを支援する際に地域の外でどのように関係構築を行っていくかについて知見が深まった。

●配食が多くなった分自宅へ見守りへ伺う頻度も多くなり、子どもだけではない家庭内の生活環境や他の家族メンバーへのケアに従事しているヤングケアラーの実態をより細かく把握できるようになった。

●行政の窓口との連携を強化したことによって、書類作成や支援制度の利用についての理解がより深まった。

●地域内外の教育機関とコンタクトを持つことで、それぞれに通っている学生のボランティアニーズを把握し、またインターンを企画することで海外ルーツの子どもたちへの長期的な支援の道がひらけてきた。

■望ましい社会状況を達成するための課題

①学習支援と子ども食堂においては、学生ボランティアの確保は継続的に達成できており、2024年からは教育大の大学院生などのある程度専門性を持ったスタッフもいるものの、やはり常駐できる人員で専門性を持ったスタッフを複数用意することが依然できていないことが課題である。

②日本語学校と継続的なインターンシップの構築には成功したが、大学の研究室やゼミ単位などで長期的にフィールドワーク先として連携をとるなどの動きは実現することができなかったため、次年度以降の課題とする。

■活動成果のアピールポイント（自由記入）

この1年間の活動を通じて	ボランティアスタッフ受け入れ先を4つ確保することで、支援体制を強化すること	**を達成しました。**

■受益者の具体的な変化（自由記入）

様々な大学や専門学校から来る学生（外国人）を受け入れる体制を整えた結果、子どもたちや保護者からも活動を楽しみにしているという声をもらえるようになった。学習支援・子ども食堂のOB・OGもスタッフとして参加してもらえるようになり、地域の中で支援のサイクルが確立しつつある。